

7章から12章までは大きな段落であり、その中で7章と8章がエルサレム、それも神殿の境内を舞台にした一つの出来事である。季節は秋、仮庵祭。

「仮庵祭」の詳細については、聖書の後ろの付録にある「用語解説」を参照して欲しい。イスラエルの民が荒野で天幕に住んだことを記念する祭。10月初旬ごろ8日間行われる。主イエスの時代には、この祭りの期間中は、毎日シロアムの池の「水」（37, 38節参照）を汲んで神殿に運び、朝夕供え物と共に祭壇に注ぐ行事が行われた。

14節. 「**祭りも既に半ばになったころ**」。祭りの4日目、それまで「**人目を避け、隠れるようにして**」（10節）が、突如、「**神殿の境内に上って行って、教え始められた**」。旧約聖書のマラキ書3章1節に、「**あなたたちが待望している主は、突如、その聖所に来られる**」とあるが、その預言通りに、主イエスは、突如、御自分の姿を現わし、教え始められたのである。

15節. 「**ユダヤ人たちは驚いた**」。彼らは、「**この人は、学問をしたわけでもないのに、どうして聖書をこんなによく知ってるのだろう**」と驚く。原文には「**聖書**」という言葉はない。「**もろもろの文字**」という言葉（γράμμα グラムマの複数形である γράμματα グラムマタ）になっている。

【NKJV】 And the Jews marveled, saying, "How does this Man know letters, having never studied?"

【TEV】 The Jewish authorities were greatly surprised and said, "How does this man know so much when he has never been to school?"

当時、ユダヤでは6歳の時から文字を習っていたので、ここでは「文字」についてではなく、「**学問をしたわけでもないのに**」という言葉からも分かるように、ユダヤ教の専門の学者であるラビたちの学問の方法を習ったこともないのに、という意味である。

16節. 主イエスは「**わたしの教えは、自分の教えではなく、わたしをお遣わしになった方の教えである**」と応える。当時、律法学者たち、その多くはファリサイ派であるが、このファリサイ派のラビたちは、決して、自分がこう思う、自分がこういうことを考え付いた、というオリジナリティを主張せず、必ず、「ラビ誰だれは」「ラビ誰は」というように先輩や偉い先生の言葉を引用して、結局、自分たちの主張の裏付けにする、という学説の展開の仕方をしていた。

ファリサイ派ラビたちの学説の展開の仕方を用いながら、主イエスは、御自身の教えは、自分自身の教えではなくて、「**わたしをお遣わしになった方**」、つまり神様からの教えを教えていると語る。

17 節. 著名な先生から習った説は、同じ門下生なら知っているはず。そこで主イエスは「この方」、つまり神様の「御心を行おうとする者は、わたしの教えが神から出たものか、わたしが勝手に話しているのか、分かるはずである」と言われる。

「御心を行おうとする者」であって「行っている者」ではないところに注意したい。神様の御心を完全に「行う」ことができるのは、主イエス、唯お一人のみである。神様の御心を行いたいと願う、そういう願い、そういう意欲、志を持っている者は、主イエスの語っておられることが神様からの教えであるあることが「わかるはずである」と言われている。

問題は、主イエスの教えそのものではなく、その教えを聞いている者の方にある。神様の御心を知っているか、それを行おうと願っているか、主イエスはそう問うておられる。

18 節. 「自分勝手に話す者は、自分の栄光を求める。しかし、自分をお遣わしになつた方の栄光を求める者は真実な人であり、その人には不義がない。」

自分の学説、自分の新発見を一生懸命に吹聴する学者は、自ずから自分の名誉欲に負けてしまって偽りとか不真実というものがその学説の中に入って来ることがある。

聴き手側に「不義」があるという第一の証拠は、19 節に語られている。

「モーセはあなたたちに律法を与えたではないか。ところが、あなたたちはだれもその律法を守らない。なぜ、わたしを殺そうとするのか。」

モーセの十戒に「殺してはならない」という戒めがある。ところが、それを知っているあなたがたが今、「わたしを殺そうと」している。それほどに、あなた方はモーセの掟を守る気がないではないか、という。

次の証拠は 21 節から 23 節にある「安息日」と「割礼」に関する話である。

「イエスは答えて言われた。『わたしが一つの業を行ったというので、あなたたちは皆驚いている。しかし、モーセはあなたたちに割礼を命じた。——もっとも、これはモーセからではなく、族長たちから始まったのだが——だから、あなたたちは安息日にも割礼を施している。モーセの律法を破らないようにと、人は安息日であっても割礼を受けるのに、わたしが安息日に全身をいやしたからといって腹を立てるのか。』」

「安息日」とは、週の第 7 日土曜日に、神様の祝福を前面的に受け取るために、人間がすべての業を休んで神礼拝をする日である。この安息日が聖書の中で初めて記されるのは、出エジプト記の第 16 章、エジプトを出たイスラエルの人たちが荒れ野でマナを頂く出来事の所で、初めて命じられる。その直後の 20 章で、モーセの十戒の第 4 戒に「安息日を心に留め、これを聖別せよ」と、明確に律法として決まった。このように、安息日は、イスラエル民族の出エジプトの後、神の民となってから始まった契約的な命令である。

「割礼」は、レビ記の中にモーセが命じた命令があるが (12:3)、本日の 22 節に断り書き「もっとも、これはモーセからではなく、族長から始まった」とあるように、古い習

慣であった（アブラハムの時から。創世記 17 章。詳細については、聖書の後ろの付録「用語解説」を参照）。ユダヤでは男の子が生まれたら八日目に、必ず割礼を施すことに決まっている。それが例え安息日であっても施す。

このような「割礼」の習慣が昔からずっとある中で、モーセは、「安息日には」「いかなる仕事もしてはならない」（出 20 : 10）と、安息日を新しく定めたのである。

安息日の規定があるにもかかわらず「割礼」が行われるのは、「割礼」が、「安息日」が定める「いかなる仕事もしてはならない」という規定の例外として位置づけられているからである。割礼は「いかなる仕事」の中に含まれない、とラビたちは教えていた。

これを主イエスは取り上げておられる。「なぜ、わたしを殺そうとするのか」。これは 5 章の初めの所で、「三十八年も病気に苦しんでいる人」を主イエスが癒したのが「安息日であった」（5:9）ことを受けている。この出来事により「ユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとねらうようになった」（5:18）のである。

元来、安息日に何の業をもしてはならないと言ったモーセ自身は、その業から「割礼」を除外していた。神の民となる祝福のしるしでもあったからである。同じように、「わたしが安息日に全身をいやした」という例外があって、何の不思議があるのか、こういうふうに主イエスは論証しておられる。

（マルコ 3 章 4 節、「そして人々にこう言われた。『安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、殺すことか。』彼らは黙っていた。」「安息日」は神様の祝福に与る日である（創世記 2:1-3 節）

「割礼」は、宗教的なきよめの儀式であるだけでなく、特に、エジプトなどのような暑い国では、むしろ衛生的な理由から手術をした、とも言われている。ユダヤ教の割礼は、男性の全身の一部の器官を聖潔にする手術を用いて、神の民として生まれることを象徴した儀式であった。しかし、わたしは「安息日に全身をいやした」と主イエスは言われる。

ラビたちは、人間の体は 248 の器官からなる、と教えていた。「ラビ・エレアザルは言った。もし人の体の 248 の部分のうちたった一つにかかわる割礼が、安息日を廃棄するのなら、まして全身（の救い）はどれほど安息日を廃棄することだろう」（『タルムード』）。つまり割礼は安息日を廃棄しない、ということ。

それなのに、どうしてそんなに「腹を立てるのか」（23 節）と主イエスは言われる。

「腹を立てる」のは、何か、あなたがたに、例えば、安息日の律法の読み方とか、モーセの十戒の読み方とかに、「不義」、偽りの読み方があるのではないか、と主イエスは反論しておられる。

24 節。「うわべだけで裁くのをやめ、正しい裁きをしなさい。」

【NKJV】 "Do not judge according to appearance,
but judge with righteous judgment."

【TEV】 Stop judging by external standards, and judge by true standards.

口語訳では「**うわべで人をさばかないで、正しいさばきをするがよい**」となっているが、「**人を**」という言葉は原文にはない。「**人を**」という言葉が入ると狭い意味になってしまう。ここで言われているのは、もっと広く、御言葉に対する一般的な利き手の態度のことである。私の教えが自分の主義主張であるか神からのものであるか、私が本当に安息日律法に違反しているか、むしろ正しく解釈しているのか、そういうすべての判断において、「**うわべだけで**」裁かないで（判断しないで）「**正しい裁き**」（正しい判断）をしなさいと、主イエスは求めておられる。

「**うわべ**」と訳されている言葉（ὄψις、オプシス）は、「見かけ」である。みかけの文字と言葉遣いとの上っ面で“安息日に何の業もしてはならない”というから何もしてはならない、というように読む、そういう判断ではなく、もっと正しい判断をしなさい、と言われるのである。イザヤ書11章1節から4節に次のような言葉が預言されている。

「1 エッサイの株からひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの若枝が育ち、2 その上に主の霊がとどまる。知恵と識別の霊、思慮と勇気の霊、主を知り、畏れ敬う霊。3 彼は主を畏れ敬う霊に満たされる。目に見えるところによって裁きを行わず、耳にするところによって弁護することはない。4 弱い人のために正当な裁きを行い、この地の貧しい人を公平に弁護する。その口の鞭をもって地を打ち、唇の勢いをもって逆らう者を死に至らせる。」

私たちは、日常の生活で様々な判断をしなければならない。そしてその判断のほとんどは「**うわべだけ**」に基づいているのではないだろうか。どうすれば「**正しい**」判断をすることができるか。主イエスの言葉でいうと「**うわべだけで**」判断すること、裁くことを止めることである。カウンセリングとかでよく言う言葉に「心を聴く」がある。耳に入ってくる言葉だけで判断するのではなく、何故このような事を言うのか、何を訴えようとするのかなど、その心を聴けるようにする。例えば非行少年がいた場合、その言動に捕らわれず、その奥にある「声」を聴くことが「**正しい**」判断につながるのではないだろうか。

聖書を読む、説教と聴くことにおいても同じことが言える。トマス・アケンピスはその名著『キリストにならいて』の中で「**聖書はすべて、それが書かれたと同じ精神をもって読まなければならない**」と言っている。聖書は、ただ文字だけ辞書で引いて文法通りに読んで行けば読めるかという、そうではない。聖書が書かれている同じ精神を持って読まなければならない、正しく読んだことにはならない。

テモテへの手紙二 3 章 15, 16 節、

「また、自分が幼い日から聖書に親しんできたことをも知っているからです。この書物は、キリスト・イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、あなたに与えることができます。聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です。」